



アダム・ドーリング

2009年7月

国籍：カナダ

道場：宮崎合気道会

ドーリングさんは内弟子として数週間所沢道場に滞在しました。滞在の最後に一級の審査に挑戦し、無事合格しました。

合気道とともに生きる：内弟子として学んだこと

アダム・ドーリング

### 内弟子になるまで

「何でここにいるの。というか、何で内弟子になろうと決めたの」住込みの弟子になったその日に、新しい合気道の仲間に興味深そうに尋ねられました。道場はサウナのように、おまけに長旅で疲れきった私は言葉に詰まりながら「自分に対する挑戦・・・かな？」と、曖昧ではっきりしない返答をしました。

実を言うと多少の期待を持って小林道場にやってきたのです。私は弘明先生と宮崎県にある傘下の道場でほんの数回稽古でお会いしただけです。その優れた技とおおらかな人柄は、小林流の合気道をもっと学びたいという気を起こさせました。そして2008年、第44回岩井合同合宿に参加することを決めました。そこで初めて合気道小林道場とよばれる素晴らしい合気道のコミュニティーを目の当たりにしました。

短いながらもその印象はずっと残りました。日本での2年間の仕事の契約も8月で終わるので、残りの休暇は日本の南の楽園宮崎を離れ、東京の熱気の中で内弟子になることを決心しました。

### 生活を通して学ぶ

「内弟子になるということは旅行者の経験をするということではない。合気道のプロフェッショナルになるための訓練である。夏合宿の延長でもない。鍛錬をすることで合気道のコミュニティーや文化の一部になる学びの場である。ミステリアスでもエキゾチックでもない。修行である」

—内弟子日記 7日目 2009年7月18日

東京に出発する前は、内弟子になるとはどんなことなのか、ほとんど考える暇がありませんでした。非常に厳しいトレーニングスケジュールは噂以上のものであるとか、他の人たちの内弟子体験記から調べることもできたのにとか、さらには骨の折れる掃除の苦行のことなどです。稽

古と清掃は間違いなく自分の時間とエネルギーの大部分を奪いますが、これらの行為のみで内弟子の経験を説明できるわけではありません。

住み込んでみてすぐに自分が合気道ツーリストではない、ということがはっきりします。私は長いこと日本に



住んでいるのですが、恥ずかしながら、私の外国人としての立場に対して幾許かの気遣いをもって接してもらっていた、ということに慣れてしまっていました。つまり、単に日本人ではないというだけで、いわれのない特別待遇をうけることに慣れ切ってしまったのです。これが小林道場では違いました。能力や出身地、滞在期間を問わず、皆平等に扱われます。基本的に私に期待されることは、(1) 毎日、集中し楽しく稽古すること (2) たとえ短い期間であっても合気道小林道場の真のメンバーになるよう努力することです。三日もするとこのことが、肉体的にも精神的にも容易ではないという事が明白になります。一週目も終わりに近づくと、内弟子として合気道と共に生活することがより理解できるようになり始めます。

「合気道とともに生きる」たとえどんなに疲れていようが、空腹だろうが、暑かろうが、痛みを感じていても、稽古を続けることです。電車、歩き、自転車で40分ぐらいかかって小平の朝稽古に行く時などは、ほとんど夢遊病者のような感じでした。しかし、たとえ朦朧としていても、そこに居ることだけでも学べたことには、いつも驚嘆していました。

一緒に稽古をした様々な道場生や先生から、多くのものを得ました。例えば小林師範や小峯先生のクラスでは、合気道の稽古は常に楽しくあるべきだということを、身をもって示していらっしやいました。弘明先生は合気道だけではなく、生活における何事においても精一杯の努力と情熱が、いかに価値があるかを示して下さいました。二週間の間、親切で仲良くして下さいました上野先生は、私の座技を改善するために、どうにも長すぎる私の足を魔法のように縮める方法を教えて下さいました。笠原先生には身長195cmの私の体をどうやったら日本のサイズに縮小できるのかその秘訣を教わりました。鈴木先生は全ての技が、柔だけでも剛だけでもなく、むしろ同時にその両方から成っているという事を示して下さいました。そして内弟子仲間のアニタは、楽観主義のパワーを与えてくれました。

私はただ単に稽古に参加するというのが、最も難しいことだと発見しましたが、稽古の後はいつもすがすがしい気分になります。合気道における闘争は己との闘争のみ、とよく言われています。内弟子経験で何かを学んだとすれば、それは日々継続的に稽古に参加することで勝ち取ったものです。このことは私が今後どこに行き、どこで稽古することになるろうとも、私のなかで息づいていくことでしょう。

「合気道とともに生きる」ということはまた、稽古と技を超えた向こう側に広がる合気道の様々な側面を学ぶことでもあります。弟子への知識は経験や、おそらくそれ以上に観察によって伝えられます。どうしたら学べるのか、それは常に心して自分の身の回りの事を注意深く観察することです。稽古の時だけでなく、掃除の時も朝食を食べている時も稽古の後先生と電車に乗っている時もです。程なく、そのライフスタイル、文化、受け継がれてきた小林道場の伝統のコミュニティーに気づき始め、その真価を理解します。

合気道小林道場のコミュニティーは、他に類をみない「小林」ならではの文化を創造しています。東京やその近郊にある様々な道場は、実際、その全てが非常に大きな家族のようです。たったの二週間で小林道場の先生や弟子達とこのような強い絆を感じている自分がいます。間違いなく小林道場は私が経験した他の道場



と一線を画すのは、先生方の資質だけでなく世界中から集まる多様な人々が硬い絆で結ばれるコミュニティーであることです。私が道場に来たその日から離れるまで、私はいつも小林合気道の家族の一員として歓迎されていると感じていました。そんな中にいたので、練習を楽しみ、友人を作り、人生をより楽しいものにするために一緒に励むというのが合気道の稽古の真髄であるとわかったのです。

## 内弟子生活を終えて

どうして内弟子になろうと決めたのか正直に申しますと、私の合気道に対する真剣な気持ちを試してみたかったというのがただ一つの理由です。今までの七年間に四度も国や道場変え、合気道の練習を続けるかどうかと思悩むほどの段階に至っていました。道場を変えたことのある人ならこの過程がどんなに難しいかご存知のはずです。合気道小林道場の内弟子として二週間過ごしたことが私の合気道魂を蘇らせました。

小林道場を通して世界中の人とつながり友人になることは、私にとってあまりに興味深く重要なことですので、やめることなどできません。今、合気道は何かと問われても答えはありません。ある時、「その答え」を分かろうとすることで、より一層稽古が面白くなるのだということを見つめました。誰も私の問題に対して直接的な答えなど与えることはできない、私ができることを学び、順応し、自分自身の道を見つけないといけないということを理解し始めたのです。私が合気道を完璧に「知る」ことなどありえません。それはつまり、その理解のために常に奮闘努力し、稽古を続けるということなのです。

たった二週間の間に合気道と人生全般の両方で、こんなに学べるとは期待していませんでした。数日の間に私は家族と共に小林道場のないニュージーランドへ出発します。しかしながら内弟子の間に学んだ教えは、小林合気道の伝統の一部となって私と共に旅を続けるでしょう。

今回のことで、小林先生のご家族、内弟子の間にお会いした全ての先生や道場生にはひとかたならぬお世話になりました。このご恩は一生忘れません。

全ての方々に感謝致します。

